

11月4日 年間第31主日

知 11:23～12:2 Ⅱテサ 1:11～2:2 ルカ 19:1～10

1. ルカ

v.9 「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。」

ルカ福音書が特に強調しているのは、“主イエス・キリストの救い”は恵みとして“訪れ”て来たのであって、私たちの悔い改めも信仰もすべては“救いの訪れの結果”なのだということです。

ザアカイという人物についての興味ではなくて、この登場人物によって私たちに与えられた主イエス・キリストの救いの恵みを描くことが、ルカ福音書の目的でありました。

「アブラハムの子」とは元来はユダヤ人のことを指していて、約束による神の国の相続人である神の民イスラエルを異邦人から区別するための呼称であります。ところが主イエス・キリストの福音は異邦人をも訪れて彼らに救いを与え、ユダヤ人と「同じ約束にあずかる者」(エフェ3:6)としてくださったというのが、ルカおよび彼がその伝道のために共に歩んだ使徒パウロの主張でした。

「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた。」(ロマ4:3／創15:6)

「しかし、“それが彼の義と認められた”という言葉は、アブラハムのためだけに記されているのではなく、わたしたちのためにも記されているのです。わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められます。イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ4:23-25)

「だから、信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子であるとわきまえなさい。」(ガラ3:7)

「あなたがたは、もしキリストのものだとするなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。」(ガラ3:29)

このように、「異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたち(ユダヤ人)と一緒に受け継ぐ者、同じ体に属するもの、同じ約束にあずかる者となるという」(エフェ3:6) “キリストによって実現される秘められた計画”(エフェ3:3-4)こそが、使徒パウロが宣べ伝えた福音です。“キリストを宣べ伝える”とは、この“秘められた計画”を宣教することであると使徒パウロは理解していました。(コロ1:24-29)

私たちは異邦人でありながら、主イエス・キリストの救いの訪れによって今や「アブラハムの子」とされています。そのことへの感謝の告白として、私たちは主の言葉にアーメンと唱えます。

v.10 「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

2. ルカ

信仰が先にあったのではなくて、先ず主イエスの方から「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜ

ひあなたの家に泊まりたい」(v.5) と言って訪れて来てくださったことに注目しましょう。この物語りによってルカ福音書が伝えようとしているのと同じことを、使徒パウロは次のように宣教しました。

「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の(終末の)怒りから救われるのは、なおさらのことです。」(ロマ5:8-9)

このように理解すればこそ、次のザアカイの言葉が輝くのです。

v.8 「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」

信仰には奉獻が続きます。

3.

“奉獻”という言葉を使うとき、先ず最初に考えなければならないのはミサです。“ミサは本質的にいけにえ(奉獻)である”という教義は、教会が使徒継承によって今日まで受け継いで来たものです。第二バチカン公会議後の典礼刷新によって、この教義は四種類ある各奉獻文の中により適切かつ正確に表現されることとなりました。

それは先ず第一にキリストの十字架のいけにえであって、主キリストの代理者である司祭の奉仕によってミサの中で秘跡的に再現されます。しかし、それに伴う第二の重要な奉獻が明らかにされなければなりません。ミサ典礼書の総則を引用しましょう。

「信者の霊的いけにえは、司祭の奉仕を通して唯一の仲介者キリストのいけにえと一つに結ばれて完成する。感謝の祭儀は全教会の行為であり、……」(5)

ルカ福音書の物語りの中のザアカイの言葉は、初代教会のミサにおける会衆の奉獻を生き生きと描き出しています。

“施し”(II コリ9:11)、“教会維持費”(マタ17:24)、“援助”(使11:29、ロマ15:26)などと呼ばれるものが、本質的にはキリストのいけにえと一つに結ばれる「聖なる生けるいけにえ(奉獻)」(ロマ12:1)であることを覚えましょう。

ザアカイの物語りは過ぎ去った過去の思い出話ではなくて、今朝ここで共にミサをささげている私たち自身の物語りなのです。 アーメン、ハレルヤ。

11月11日 年間第32主日

Ⅱマカ 7:1～14 Ⅱテサ 2:16～3:5 ルカ 20:27～38

1. ルカ

サドカイ派の人々と同じように、復活があるのかないのかという仕方論ずるという誤りを、私たち自身も経験して来たのではなかったか、と反省してみましょう。

今年も、典礼暦の最後の三主日は、私たちに特別に終末のことを思い起こさせる聖書の箇所がミサの中で朗読されます。

「すべての人は、神によって生きている」(v.38) のであれば、私たちにこの世の人生が終わってもその先に、再び“神によって生きる” ようになる復活の希望が待っているのです。

イスラエルの先祖アブラハムの神は、彼の息子イサクの神となり、そしてイサクの息子ヤコブの神となりました。時代が移り変わってもイスラエルの神は“過去の神” となることなく、いつもその時代に生きる民の神でありました。しかもそれぞれの時代のイスラエルは、自分たちと共に歩まれる神ヤーウエが、今なお先祖アブラハム、イサク、ヤコブの神であり続けておられることを信じました。

v.38 「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。」

彼らの先祖たちは死んで墓に葬られたけれども、やがて再び生きるようになる…… 。だからヤーウエは現在のイスラエルの民だけではなくて、今なお先祖たちの神でもあり続けておられる……。この信仰がイスラエルの歴史を貫いて受け継がれて来ていることを、今朝のルカ福音書の物語りは証言しているのです。

2. Ⅱマカ

アンティオコス・エピファネスによるユダヤ人とユダヤ教への弾圧の物語りの中で、エレアザルの殉教と七人の兄弟(とその母)の殉教の話は、イスラエルの民が受け継いで来た信仰の核心を見事に証言してくれています。

キリスト教会は、この復活の希望の信仰を受け継ぎました。キリストが死者の中から復活して、すべての死者の将来の復活の初穂となられたからです(Ⅱコリ 15:20)。ですから私たちキリスト者こそが、最もよくこのⅡマカ の殉教者たちの証言した信仰を理解することが出来るのです。

復活はそれがあつかないかという仕方論ずる問題ではありません。そうではなくて、その希望の信仰によって生きているか否かが問われている事柄なのです。私たちは洗礼の秘跡によって「キリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。」(ロマ 6:4) そしてこの「希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれている

からです。」(ロマ5:5)

3. II テサ

使徒たちから受け継いで、代々の教会がささげて来たミサは、これに参加する会衆にいつも「永遠の慰めと確かな希望とを」(v.16) 与えて来ました。なぜなら、私たちの主イエス・キリストは、聖霊の交わりの中で、父なる神と共に会衆の「心を励まし、また強め」(v.17) くださるからです。

「わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。」(ロマ5:3-4) だからこそ、使徒パウロがテサロニケの信徒たちのために祈ったその祈りは、今なお現代の私たちキリスト者のための祈りでもあり続けています。

v.5 「どうか、主が、あなたがたに神の愛とキリストの忍耐とを深く悟らせてくださるように。」

アーメン、ハレルヤ。

11月18日 年間第33主日

マラ 3:19～20 IIテサ 3:7～12 ルカ 21:5～19

1. ルカ

vv.5-6 「イエスは言われた。“……一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。”」

主イエスが当時のエルサレム神殿の崩壊を予告された通りに、紀元 70 年にはローマ軍との激しい戦闘の末、ついに神殿は炎上して消滅し、ユダヤ人は祖国のない民として全世界に散らされてしまいました。以来 1948 年のイスラエル共和国建国に至るまで、ユダヤ人は異民族の支配する国々に寄留して、多くの偏見と迫害に耐えて生きて来たのでした。国家としては滅んでも、ユダヤ民族の歴史は終わることなく、特にその信仰の歴史としての歩みは、その後キリスト教にもいろいろな影響をもたらします。

このような歴史の背景の上に現代の中東問題が存在するのと全く同じように、現代の私たちキリスト教会も置かれています。私たちはそのような歴史的背景を持った 21 世紀という時代に、主日のミサでこのイエスの言葉を聞いているのです。

2.

私たちがミサの中で、聖書を通して神のことは食卓の豊かな富に与かることができるのは、父の右に座したもう現在のキリストが聖書の朗読を通し、また司祭の説教を通して語られるからです。聖書は単なる古い文書、古い記録としてではなくて、ミサの中では現在の生きた神のことは語りかけます。ミサにおける朗読と説教の背後には、父の右に座したもう現在のキリストが働いておられるのです。しかも聖書の文脈やその歴史的背景、また文書形成の意図などとの密接な結びつきの中で、神のことは現代の教会に向かって語りかけているのであって、私たちは聖書から離れては正しく神のことは聞くことが出来ません。

3. マラ

最初に述べたように、主イエスが語られたときには紀元 70 年の神殿崩壊を予告していたお言葉を、それから 1900 年以上も経った現代のキリスト者である私たちが、今朝聞いているのです。しかもその同じお言葉を、父なる神の右に座したもう現在のキリストのことは聞くのです。典礼暦の最後から二つ目の主日である今朝のミサで、私たちは現在の生きた神のことは聞かされます。

今朝の福音を、第一朗読のマラキ書が解説しています。

vv.19-20 「見よ、その日が来る。炉のように燃える日が。……しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには、義の太陽が昇る。その翼にはいやす力がある。」

ルカ福音書の主イエスの言葉は、このようにして過ぎ去った過去の話ではなく、21 世紀を歩み始めたば

かりの私たちキリスト者への警告なのです。

「忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」(ルカ21:19)

4.

典礼暦が待降節第一主日から始まって、王であるキリストの祭日で終わるということを通して、代々の教会はキリストの福音の終末的性格というものを明確に表現して来ました。主日の聖書の朗読配分も、この教会の伝統を証ししています。

主日ごとに、私たちミサに集まる会衆は、その日にこそ聞くべき特別な神のことばに触れるのです。父の右に座したもう生けるキリストは、典礼暦の中のおのこの主日に応じて、その日の特別な呼びかけを聖書を通して私たちに語りかけてくださいます。

今朝、主イエスは私たちに語っておられます。“終末の裁きの日は確かに近づいて来ている。しかし忍耐して神の国の希望に生きるなら、「あなたがたの髪の毛の一本も決してなくなるまい。」(ルカ21:18)”

アーメン、ハレルヤ。

11月25日 王であるキリスト

サム下 5:1～3 コロ 1:12～20 ルカ 23:35～43

1. ルカ

vv.42-43 「そして、“イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください”と言った。するとイエスは、“はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる”と言われた。」

他の福音書にはないが、ルカ福音書だけが語っているこの挿話は、教会が使徒たちから受け継いだキリストの福音についての非常に貴重な解説の役割を果たしています。

民衆、議員、兵士たちは、“救い”とは人が現在自分に迫っている危機から脱出し、解放されることだと理解していました。しかしイエスと共に十字架にかけられていた犯罪人の一人は、それとは別の種類の救いを約束されたのでした。十字架と復活のイエスが王である国・・・すなわち神の国・・・に受け入れられること、神の国の栄光を受け継ぐようになること、それこそが救いなのだということを、ルカ福音書はこの挿話によって説明しているのです。

死者の中から復活して、父なる神の右の座に着かれた主イエス・キリストは、やがて終末の日に出現する神の国の王として来られます。

2. サム下

サウルが死んだ後(1:1)、ダビデはヘブロンに上って、恐らくそこの古来の聖所マムレ(創 13:18, 23:16-20, 25:7-10, 50:12-13)において油注がれて、「ユダの家の王」となりました(2:2-4)。「ダビデがユダの家の王としてヘブロンにとどまった期間は七年六か月であった」(2:11)と記されています。その後イスラエルの長老たち全員がダビデのもとに来て油を注ぎ、彼をイスラエルとユダの全土の王とします(5:5)。

そこでダビデはイスラエルのどの部族にも属していなかったエブス人の町エルサレムを陥れて、これを王国の首都としました(5:6-10)。そして神の箱をエルサレムに迎えることによって、これを12部族の結束の宗教的中心にしようとします(6章)。それ以来エルサレムは、イスラエル民族の最も神聖な場所となったのでした。

このような複雑な歴史の流れを、神の救いの御業の進展の過程として見ると、この世界の歴史の背後にある“神の救いの歴史(救済史)”が浮かび上がって来ます。

神の子イエス・キリストの受肉と、その受難と復活を経て、王であるキリストの来臨に至る“神の救いの歴史”の中に、地上の教会は置かれているのだということを、代々の教会は毎年この典礼暦の最後の主日に、思い起こすべく聞かされて歩んで来ました。

3. コロ

私たち教会を神の国の相続者にしてくださった神に感謝しましょう。

教会は御子イエス・キリストによって贖われた民であります。私たちは主の死に与かる洗礼の秘跡を通して罪の赦しを受け、主の復活にも与かる者となっています。かつては闇の力の奴隷であったのに、今は愛する御子の支配下に移され、やがて王であるキリストと共に神の国を相続する日が来るのを待っています。

その上、主イエス・キリストは終末の日の王であるばかりではなくて、現在は地上の共同体である教会の頭です。

v.18 「御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、すべてのことにおいて第一の者となられたのです。」

そして教会の頭であることによって、教会を通して、天地万物の王であるキリストなのです。

私たちの希望は天に蓄えられている(1:5)ことを覚えましょう。

アーメン、ハレルヤ。